

低温熱傷

寒い時期にはこたつやストーブ、湯たんぽ、カイロなどの暖房器具が必需品となります。これらは使い方を正しく扱えば寒い日でも快適に過ごすことができますが、使い方を間違えると低温熱傷を生じるリスクがあります。

低温熱傷とは

低温熱傷とは短時間の接触では問題とならない程度の温度が、長時間にわたって接触部に作用することにより生じるやけどです。痛みを伴わず、気がつかないうちに重症化してしまうことがあります。低温熱傷を生じる温度の目安は大体44度で3～4時間、46度で30分～1時間、50度で2～3分とされています。通常の熱傷とは異なり皮膚の変化が緩やかに生じるためやけどしてからしばらく時間が経過してから皮膚が壊死してくることがあります。原因は暖房器具のほかに、スマートフォンやノート型パソコンの普及に伴い熱くなったスマートフォンやパソコンのバッテリーで低温熱傷を生じた報告がされるようになってきました。特にスマートフォンは寝ているときに枕元で充電するというかたも多いと思いますが、熟睡していると気がつかないうちに充電中のスマートフォンに皮膚が密着し低温熱傷を生じた事例がありますので、寝ているときに充電する際は皮膚に密着しない場所に置いておくなどの対策が必要です。

低温熱傷の症状

熱傷は皮膚がどのくらいのダメージを受けたかによって1度、2度、3度と症状が分かれています。1度は皮膚の赤みとヒリヒリした感があります。2度は皮膚の発赤とともに強い痛みや水ぶくれを伴います。3度は皮膚が死んで壊死という状態になります。普通の熱傷は皮膚の表面に熱の原因になるものが接することで起こりますが、低温熱傷では皮膚の深いところまでじわじわと進行するため普通の熱傷よりも治りにくくなります。低温熱傷になりやすいのは高齢者や小さな子供、運動能力や知覚に麻痺がある人、泥酔している人、体の感覚が鈍くなっている人です。

低温熱傷の治療

受傷早期は外用治療を行います。症状が進行し皮膚が壊死してしまうと外科的、あるいは化学的に壊死組織を除去する必要があります。広範囲の受傷で皮膚の深いところまで壊死を生じているときは通常の熱傷と同様に皮膚移植が必要となります。また壊死した皮膚をそのままにしていると細菌感染を生じ抗生剤の投与が必要となることもあります。治療期間は熱傷を起こした皮膚組織の範囲や深さにもよりますが、長いものだと数か月かかることもあります。

低温熱傷を生じた場合は症状が進行する前に医師の診断を受けましょう。

本田皮ふ科アレルギー科 院長 神尾 芳幸



医心伝心

12月に入りぐっと日が短くなってきました。12月22日は冬至、一年で最も昼の時間が短くなる日です。冬至にはかぼちゃを食べる風習があります。夏野菜のかぼちゃは、追熟で味わい深くなり冬至の頃が最も美味しくなるそうです。是非小豆と一緒に煮染めたかぼちゃで、春に向かい少しずつ昼の時間が長くなっていく節目でもある冬至を迎えてみてください。

看護師への復職を考えている方へ

潜在看護師の復職支援研修を行っています。
大村市医師会にご相談下さい。

